

故郷を離れて

山城24回 伊藤重範

高校を卒業後、大学受験に失敗した私は、一足先に転勤していた父のいる群馬県前橋市で浪人生活を送るために引越して行きました。

生まれてから高校を卒業するまで地元の中で育ち、いつも慣れた多くの友人たちに囲まれていた私にとっては関東の、しかも群馬の地はあまりに遠く、浪人生活ということもあって、まるで異境の地へ流されて行くように感じていました。そして、当時前橋市に一つしかなかった予備校の級友たちはそんな私を奇異の目で見ていたようです。

当時の日本は、七十年安保闘争で国中が混乱を極め、価値観も大きく変化しつつありました。学校は学問の場から政治闘争の場と化し、若者たちは自由を強く求めていました。彼等は皆、長髪・ジーンズ・Tシャツがユニホームのようなもので、ギターを抱え、フォークソングを口ずさんでいました。当然、私もそ

んな中の一人でしたが、当時の群馬の同世代の人たちとは随分と違っていました。予備校へは学生服やセーラー服で通学する彼らにとっても、私という存在は言葉も服装も余りに変わり過ぎて危機感を持っていたようです。同じ日本の中でこんなにも違うところが存在することに私も驚きを隠せませんでした。

また、自分たちの卒業してきた高校によって、上下関係を作ろうとする傾向がありました。明らかに彼らとは異なる私はその対象にもなっていないませんでした。

受験勉強をするための予備校通いではありますが、孤独で、誰とも話もせず、黙々と過ごす時間に押しつぶされそうになっていたときの事です。

漢文の講義があり、その時に高校の教科書の呈示を求められました。机の上に置かれたそれぞれの教科書を見ながら、批評をされていた先生が私のところへ回って来られました。そして、私の教科書を手にとると、中を少し見て尋ねられました。

「君はどここの学校かね。」

「山城です。京都から来ました。」

「他に副読本はないのかい。おかしいなあ。漢文は好きかね。」
「教科書以外には何も使っていません。漢文は結構好きです。」
すると、最後に教科書を元の位置に返しながら、こう言われました。

「これは少し難しい。今この教室にいる彼らには、これでは少々理解し難いかも知らない。これから一年かけてここまでいけるように頑張るんだがね。君には分からないだろうが、良い教育を受けてきましたね。後は、私の授業を受けるのではなく、時間の許せる限り本を読みなさい。」

私は哑然としていました。周りの人たちもさぞ驚かされたことでしょう。

恥ずかしながら、この時まで、私は自分が卒業してきた山城高校をさほど意識していませんでした。群馬県と同世代の人たちの型にはまった姿を見て、服装が自由であった私からは可哀想と思ってはいましたが、正直そんなすごい学校だったとは思ってもみない事でした。そしてこのとき以来、私は自分の学の無さを恥じ、日々の生活を受験へと向けていくようになります。

京都弁を喋る変な奴に変わりはありませんでしたが、少しずつ話をするようにもなりましたし、音楽を通しての友人も出来、このとき以降、私にとっての群馬は大自然の恵みに富む第二の故郷になりました。

私にとっての高校生活は個性を尊重し、のびのびと育つがままに、自由でおおらかな校風の中で、自我が大きく変化し、育ててもらったときでした。今の自分の原型を造りあげてくれた

ときでもあります。危なげな私たちを見守って下さった先生方には感謝の気持ちが絶えません。

五十を越し、少しずつ落ちていく体力とは裏腹に、尽きぬ好奇心を、やわらかな自由を愛する心を持ち続けていきたいと思っております。



山城 11 回 伊藤信子